

南原幹雄

付き馬屋おえん
暗闇始末



付き馬屋おえん 暗闇始末

南原幹雄

付き馬屋おえん

暗闇始末

(新装版)

著者

南原 幹雄

発行者

深見 兵吉

発行所

光風社出版

東京都文京区関口一三二一四

郵便番号一一二

電話番号〇三(二〇四)二四四一

FAX 〇三(二〇四)二四四二

振替東京八一二九一三

印刷 大盛印 刷

製本 越後堂製本

◎乱丁、落丁の場合はお取り替えます

定価はカバーに明記してあります

© MIKIO NANBARA 1990 Printed in Japan

ISBN4-87519-171-5 C0093

目次

第一話	付き馬屋おえん	5
第二話	爪の代金五十両	46
第三話	暗闇始末	86
第四話	鉤縄地獄	130
第五話	かまいたち	168
第六話	新造あらし	208
第七話	首吊り女郎	247
第八話	はらみ文殊	285

装
画
中
江
蒼

付き馬屋おえん

暗闇始末

第一話 付き馬屋おえん

一

かつては、おなじ家の表と裏でべつの商いあきなをしていた。

新吉原のとなり町——。天清、とそめぬいた暖簾のれんをだし、掛行灯かけあんどんをかかげた天ぶら屋は表通りの角店かどで、裏は横丁にむいたしもた屋ふうの玄関えんかんになっていた。

しもた屋のほうは、暖簾、看板こそだしていなかったが、つい先月までは、れっきとした屋号をもつ商いを張っていたのだ。夕から宵にかけてひっきりなしに客が出入りする表の天ぶら屋にくらべてもおとらぬくらい稼とぎをあげていた。

「弁天屋さん、仁兵衛さんはおいででしよるか」

この半月ばかり客出入りがほとんどなくなった裏の玄関の格子戸がいたので、おえんは立って行った。

客は、遊女屋か茶屋の番頭のような風情をした男だった。

「お父つつあんは表の帳場におりますけど、弁天屋のほうは先月で店じまいをいたしました……」
「わたしは、吉原なかの藤ノ屋で番頭をしている勘三という者ものですが、どうしても仁兵衛さんにおたのみしたいことがございまして」

おえんが見ずかして言うのと、勘三はためらいがちな顔になって、式台ごしに奥をのぞきこんだ。式台は客と用談する六畳間につづいており、そこは天清の料理場と背中あわせになっていた。料理場のむこうが帳場だった。式台から首をのばせば、帳場にすわっている仁兵衛のうしろ姿がみえた。

「でも、お父つつあんは、そのほうのお仕事ならもうおひき受けしないと断言しておられますけど」

「お手間をとらせて申し訳ありませんが、話だけ聞いていただきたいのでございます。それで駄目なれば、べつの思案をいたします」

娘むすめばかりでばつと花が咲きひらいたような見事な器量のおえんにそっけなく言われて、勘三はいっそう下手にでたのだった。

この手の客は容易なことではひきさがりそうにないとみて、おえんはあっさりと父を呼びに立った。藤ノ屋は京町一丁目の中見世で、かなりの老舗しんぽとしてきこえていた。その番頭が折入って、と仁兵衛に面会をもとめる以上、用件はきかずともわかっていた。

馬屋うまや、という稼業はひろい江戸のなかで、弁天屋をふくめてもそう何軒もなかった。

江戸で日に千両おちるところといえ、二丁町の芝居町と、吉原のほかはなかったが、『春宵一刻あたいせきん 値千金……』をかえりみず快楽の夢に酔いしれたつけは、翌朝になれば待たなしまわってくる。

懷中のものでまかなえぬときは、遊女屋の牛ぎゅう（牛太郎）が馬に變じてついてくるが、この付き馬つきうまでさえも取りたてがきかぬときにかぎって、遊女屋や茶屋から、馬屋という専門の取りたて屋に依頼がまわってくるのだ。

吉原へのかよい道、日本堤の南にそう浅草・田町に、太どころの馬屋といわれる越後屋、青柳、さらに弁天屋の三軒があった。証文（委任状）をうけとると、馬屋では若い者をつかつて、遊客の居所にでむいて談判をおこなう。取りたての方法に馬屋の技術うでがかかっていたが、場合によってはかなり荒っぽいやりかたもおこなわれた。取りたてた金の半分は馬屋の手にのこり、あとの半金が依頼主にわたされるのだ。

請け負った仕事はほとんど九分どおり、取りたてられたというから、彼等の辣腕らつわんぶりが想像される。それでいて、過去にいちども馬屋の仕事が公儀おかみに訴えられたことがないのは、馬屋の主人がほとんど岡っ引を兼業していたためだった。十手を持たぬ馬屋としては、ちかごろ弁天屋がただ一軒の異色であった。かつては仁兵衛も岡っ引と二足の草鞋わらじをはいていたが、数年まえに天清の店をだしたとき、十手、捕縄を返上していたのだった。

左手の山谷堀を吉原がよいの猪牙舟ちよきふねが遊客をのせて、さかんにのぼりはじめていた。勘三がおとずれてきた日の夕間暮ゆふまぐれ、おえんは日本堤の土手があるいて、聖天町しやうてんちやうの町なみのなかへ入っていった。

このあたりの家なみや町の風物には子供のころから馴染んでおり、道筋、まがり角などは横丁、露地にいたるまでそらんじていた。

「とんだじゃ馬にそぢちやがったぜ、親のいうことなんぞ、耳もかさねえ有様だ」

いまいましげな捨てぜりふでおえんをおくりだした仁兵衛の声が、耳のうちにのこっていた。

「わたしは馬屋の娘ですよ。じゃじゃ馬もしかたないじゃありませんか」

にくまれ口でこたえると、

「だったら、店の若い者もんをつれていきな」

仁兵衛はあくまでもおえんの身を気づかった。

「お父つつあんの娘ですから、そんな気づかいは無用ですよ」

ことさら冷淡に振舞って家をでてきたおえんだった。

仁兵衛が馬屋を廃業したのも、よる年波をかんがえたというよりは、跡とりの仁吉が父親に似ぬおとなしい気性であったので、それに見きりをつけたのと、馬屋の娘ではおえんによい縁談がもちこまれぬと心配したためだった。仁吉は子供のころからおもいやりのふかい気性で、妹のおえんの目から見ても齒がゆいくらいの若者だった。情無用に有金を吐きださせ、ときには力づくにうったえても取りたてねばならぬ馬屋には、仁吉はどうみてもむいていなかった。

おえんは、町内きつての器量よし、二丁目小町といわれてそだったわりには縁遠くて、この正月で十九をむかえ、世間で嫁きおくれといわれる年ごろにさしかかっていた。仁兵衛は祖父の代からつづいていた馬屋を廃業し、仁吉に天清の料理場をまかせて、自分もこの月いらい店の帳場にすわっているのだ。

ところが、廃業してまで娘の縁談を気づかった親ごころも、おえんにはいっこうつたわっていない

ようだった。昼間、おえんは藤ノ屋の勘三が仁兵衛にたのみこんでいる話を、唐紙からかみのむこうで立ち聞いた。仁兵衛が、もう弁天屋は廃業したのだから、とことをわけてことわりを言っているさなか、おえんはしずかに唐紙をあけて、用談部屋へ入っていった。そして、

「その取りたては、よろしかったらお父つあんにかわってわたしにやらせてくれませんか」

あっけにとられてゐる仁兵衛を尻目に言い出したのだ。唐紙ごしに話をきいて、相手の名を知るにおよび、おえんはどうしても自分がでいかねばおさまらぬ氣持にかりたてられたのだった。

聖天社しょうてんのならびに、この地の名物米饅頭よめまんじゅうを売る鶴屋の看板がみえ、おえんは聖天社と鶴屋のまえをとおりすぎた。聖天社は、以前許婚いけいこんであつた伊之助とつれだつてよくあそびにきたところだった。履物問屋・上州屋は鶴屋の数軒さきにあつた。

おえんは上州屋の店のまえで、ちよつと足をとめた。かつて言いかわした仲で、一昨年おととしの秋、まるでだましたようなかたちで先方から破談を申しこんできた男をおとずれるには、おえんのようなお俠きやくでもそれなりこころの用意が必要だった。伊之助は上州屋の跡とり息子だった。

縁談がこわれてからも、伊之助の噂はときどき耳にしていた。博奕ばくち、借金、女……。いつも伊之助にはよくない噂がつきまといつた。

おえんは暖簾をくぐつて、入つていった。客や顔見知りの店の者がいたが、おえんは見むきもしなかつた。つみあげである各種の草履や雪駄、下駄などのあいだをぬけて、まっすぐに帳場へすすんだ。おえんに気づいている店の者もいたようだが、声をかけてくる者はいなかつた。当節はやりの浅葱あさぎ色の縞とめぞでの留袖に、朱色の呉紹服連帶ごせうふくれんおびをしめ、娘島田に玳瑁たいまいの櫛簪かんざし、華麗濃艶でこそないが、器量を

ぞんぶんにひきたてた衣装の着こなすと、あざやかな立居にみなは見とれていた。

「あ、おえんさん」

帳場にはおえんと伊之助とのいきさつをよく知っている番頭がすわっていて、声をあげた。

「番頭さん、ご機嫌うるわしゅうございます」

おえんはにっこり頬笑んだ。思わず相手がつりこまれていきそうになるはなやいだ笑顔だった。

「これは、ほんとにおめずらしい……。おえんさんもお達者な様子でなによりで」

番頭は口のなかでもごもご言いながら、おえんの様子をうかがった。

「上州屋のみなさんも、お達者ですか」

「せっかくお見えいただきましたのに、主人もお内儀かみさんもあいにく他出中でございまして」

番頭は見当はずれな返事をし、

「旦那様やお内儀さんには、ご用の筋はございません」

にっこりやんわりおえんにきめつけられて、しどろもどろになった。

「それでは……」

「伊之助さんに、ご用がございます。おいででしょうか」

「はい、ただいま……。若旦那は奥にいますとおもいます……」

言いのがれができずに、番頭はこたえたのだった。

「では、ちょっと呼んでいただきますようか。田町のおえんがきた、とそれだけおつたえになってくださいませ」

隙のないおえんの口上をうけて、早々に帳場をたち、奥へひっこんだ。

「おえんが、いたいおれに何の用があつて……」

おえんが招じられた奥の座敷に、そういつて伊之助は入つてきた。

おえんはふられた女であり、伊之助は捨てた男である。伊之助は鷹揚な態度でおえんをむかえ、すりこむなり煙管をぬきだし、雁首で煙草盆をひきよせた。田町二丁目と聖天町はほとんどなり町も同然なので、家のちかくや外出さきで二人が顔を合わせたことは幾度もあつたが、正面きつて話をするのは二年ぶりのことだった。

「相かわらずおさかんで、ほうぼうでおまえさまの噂をききますが……」

あいさつぬきでおえんのほうから話をむけると、伊之助はやにさがつた顔になった。

「おえん、おまえのほうはどうなんだえ。まだ嫁にいったというような話はきいちゃいないが」

おえんの顔や体にいやらしい視線をはわせてきた。まだ自分に気があるとみての、うぬぼれが目尻ににじんでいた。

「他人の縁談を心配するよりも、すこしは自分の身のまわりをきれいにしたらいかがですか。あんたがいろいろなところで他人様に迷惑をかけている噂をよくききますよ」

「おいおい、のっけから冗談口はきかねえでもらいてえ、おれがいつ誰に迷惑をかけているというんだね。女だからといって聞きずてにできねえことだつてあるぜ」

出鼻をくじかれて伊之助はちよつと色をなしたが、おえんは平然たるものだった。

「そんなことがよくも、しゃあしゃあと」

いいながら、おもむろに懷中へ手を入れた。そしていくつにもおりたたんだ美濃紙をとりだし、ひろげて伊之助にみせた。

証文

しやう天町上州屋いの助への貸し金、二十一兩三分二朱、田町二丁目仁へ衛うち、えん殿に取りたておねがひ申すべく、委細おまかせいたすものなり

藤ノ屋うち勘三

読んでいくうちに伊之助の態度はかわっていった。

「おまえ、馬^うんなったんだな……」
うめくように言つて、絶句した。

二

伊之助は、色の白いのっぺりとした顔だちのやさ男である。根はさほどの悪党ではないのだが、すこしばかり女に好かれるあまい顔だちと、跡とり息子を甘やかし放題にそだてた親のしつけのせいで、二十歳^{はたち}まえの年ごろからはやくも世間をみくびってしまった。博奕に手をだし、やくざ者がたむろする賭場^{どば}に出入りするようになった。負けがこんでも、店で借金をはらってくれるあいだは、

「若旦那、若旦那」

でやくざからおだてられるので、ついいい気になって、そのうえの遊びをする。気づいたときは、借金とはもうもない額にふくれあがっているが、上州屋の商いが順調なあいだは、父親も意見したあげく、しかたなく商売の金までつぎこんで伊之助の始末をしてやる、といったことを過去いくたびかかかっていた。

親が尻ぬぐいをしてきているあいだは、まだよかった。けれども博奕の借りばかりは、いきおいとめどなくなるものである。伊之助は身ぢかの者からも手あたりしだいに金を借りだした。

「どうせ、いつかは夫婦になるんだから……」

たのまれて、おえんも父に無心して家の金をかなり用だてた。母のおとよに内緒で、大事にしていた金銀や玳瑁の髪かざり、手道具を金にかえたりした。

上州屋ではそのころ商売までかたむきはじめ、伊之助がおえんの家から金をひきだしているのをうすうす承知でいながら、それを始末できないところへ追いこまれていたのだった。たびかさなる不義理を始末するために、ある日上州屋の主人夫婦がおとずれてきた。

「伊之助を勘当にいたしますから、そちら様さえご承知くださるなら縁談もなかったことに」と申し入れてきたのである。

仁兵衛夫婦もおえんも伊之助に愛想をつかしていたときだけに、あっさりと申し入れをうけ入れた。勘当ということで、すべてが水にながされ、縁談とともに貸した金もうやむやにされた。

ところがあとになって、不快なことがもちあがつた。伊之助は半年ばかり親戚に身をよせていたらしいが、その後も勘当されることなく、いつのまにか上州屋にもどって相かわらずの暮しをつづけて

いたのだった。

「親子の縁までできるってから、縁談も貸し金も水にながしたつてのに……。まるでだまされたのとおんなじじゃないか」

おとよはしきりに口惜しがった。

「だからって、他人の息子ひとの勘当をさいそくするのも穩当あんとうじゃねえ。たちなおる見こみのねえ男だが、伊之助の勘当がとけて人別にんべつが元にかえったとおもえば、めでたいことじゃねえか」

と仁兵衛がいつて、腹の虫をおさめたいきさつがある。

縁談がこわれたとき、おえんは十七だったが、当座のあいだこころの痛手はいやされなかった。すでに一度操みさおをあたえていたことも、おえんの傷をふかいものにしていた。このことがそれ以後のおえんの気性にかんりの影響をおよぼした。縁談が遠のいて、かえってこころが解きほぐれ、氣持にもゆとりがうまれた。世間をみる目もひろがった。

以前は家の稼業にひけ目を感じていたものだが、いつしかそんなことも氣にならなくなった。まえから、山下瓦町の町道場へ長刀ながなたや小太刀の稽古にかよっていたが、そのころからおえんは鉤繩かぎなわの稽古をはじめた。

鉤繩は本来、岡っ引がやる早繩のことで、繩のさきに鉤がついていてその鉤を相手の襟元にひっかけて一本繩でぐるぐる巻きにしる術である。繩はふつう三尋みひろ（およそ三間）のながさである。

おえんは繩のかわりに丈夫な絹糸を何本もより合わせた紐にして、携帯に便利な工夫をした。

おえんといくつも年齢のかわらぬ浜蔵という店の若い者を相手に、庭さきで稽古をしては、